

(12) オクラ
ア 殺菌剤

農 薬 名	成 分 名	FRAC コード	適 用 病 害 虫 名							注 意 事 項
			う ど ん こ 病	苗 立 枯 病 P R	灰 色 か び 病	葉 す す 病 (黒 斑 病)	葉 枯 細 菌 病			
ア グ ロ ケ ア 水 和 剤	バチルス スプチス	BM02	野		野					野:【野菜類登録】
ア フェ ッ ト フ ロ ア ブ ル	ペンチピラト	7	◎		◎					
ア ミ ス タ ー 2 0 フ ロ ア ブ ル	アゾキシトピン	11	◎							
ア ー リ ー セ ー フ サ ン ク リ ス タ ル 乳 剤	脂肪酸グリセト		野							野:【野菜類登録】注2)
硫 黄 粉 剤 5 0	硫黄	M02	野							野:【野菜類登録】
イ ン プ レ ッ シ ョ ン ク リ ア	バチルス アミロリクエファシエンス	BM02	野		野					野:【野菜類登録】
オ ー ソ サ イ ド 水 和 剤 8 0	キャブタ	M04		◎						
カ ス ミ ン ボ ル ド ー カ ッ パ ー シ ン 水 和 剤	カスカマイシン・塩基性塩化銅	24・M01					◎			
カ リ グ リ ー ン	炭酸水素カルウム	NC	野		野					野:【野菜類登録】
ジ ー フ ァ イ ン 水 和 剤	炭酸水素ナトリウム・無水硫酸銅	NC・M01	野							野:【野菜類登録】
タ チ ガ レ ン 液 剤	ヒドロキシイキサゾール	32		◎						
タ チ ガ レ フ ァ イ ト 液 剤	ヒドロキシイキサゾール	32		◎						
ダ コ ニ ー ル 1 0 0 0	TPN	M05				◎				
ト ッ プ ジ ン M 水 和 剤	チオファネートメチル	1				◎				
ト リ フ ミ ン 水 和 剤	トリフルゾール	3	◎			◎				高温時の散布は葉害の恐れがある。
ハ ー モ メ イ ト 水 溶 剤	炭酸水素ナトリウム	NC	野		野					野:【野菜類登録】
フ ェ ン タ ジ ス タ 顆 粒 水 和 剤	ピリベンカルブ	11				◎				
ベ ン レ ー ト 水 和 剤	ベノミル	1				◎				
ボ ト キ ラ ー 水 和 剤	バチルス スプチス	BM02	野		野					野:【野菜類登録】 湿展性の展着剤を加用する。低温時の散布は避ける(10℃以上)。
モ レ ス タ ン 水 和 剤	キノキサリン系	M10	◎							高温時の散布は葉害の恐れがある。

農 薬 名	成 分 名	FRAC コード	適 用 病 害 虫 名							注 意 事 項	
			う ど ん こ 病	苗 立 枯 病 P R	灰 色 か び 病	葉 す す 病 (黒 斑 病)	葉 枯 細 菌 病				
ユニフォーム粒剤	アゾキシトピオン・メタラキシルM	11・4		◎							
リゾレックス水和剤	トルクロホスチル	14			◎						植穴土壌灌注。
ロブラール水和剤	イプロジオン	2				◎	◎				

注1) 苗立枯病の対象病原菌の表記 P:Pythium , R:Rhizoctonia

注2) ストリリ系薬剤およびTPN剤とその混合剤との混用および近接散布を避ける。ストリリ系薬剤を含む農薬を散布した後に本剤を使用する際は2週間以上間隔をあける。アタミプリド剤、トリフルメニル剤、ペニシリン剤、キャブ剤と混用しない。

エ 病虫害防除法（オクラ）

（ア）うどんこ病 *Oidiopsis sicula*

（防除のねらい）

ピーマンうどんこ病菌と同種であり、ピーマンから伝染する機会が多い。密植で風通しが悪かったり、高温や比較的乾燥した条件下で多発する傾向がある。

（耕種的防除法）

施設栽培では換気を十分に行う。

（イ）苗立枯性病害 *Pythium sp.*, *Rhizoctonia solani*

（防除のねらい）

発芽前立枯を起こすこともあるが、一般には本葉2枚展開までの幼苗期に侵される。病原菌はピシウム、リゾクトニアなど数種がある。高温時に播種するほど発生も多い。

（耕種的防除法）

- （1）連作を避ける。
- （2）発病株は取り除く。

（ウ）灰色かび病 *Botrytis cinerea*

（防除のねらい）

施設栽培で20℃前後のとき多く発生する。咲き終わった花卉から発病がはじまり、果実や小枝に伝染する。

（耕種的防除法）

- （1）施設栽培では換気を十分に図る。
- （2）病葉果実、花卉は努めて除去する。

（エ）葉枯細菌病 *Pseudomonas cichorii*, *Pseudomonas viridiflava*

（防除のねらい）

土壌中に生存している病原細菌が、雨水や灌水等によって跳ね上がり感染する。春から梅雨期までに発生が多く見られる。若い植物に発生し、梅雨明け以降の収穫期では発生しない。病原菌は多犯性で多くの作物に感染する。

（耕種的防除法）

マルチ栽培が効果的である。

（オ）葉すす病（黒斑病） *Pseudocercospora abelmoschi*

（防除のねらい）

28℃付近で湿度の高い条件下でまん延する。前作の被害葉が伝染源となるので、伝染源を断つように努める。

（耕種的防除法）

- （1）収穫が終了後、速やかにほ場内の株、茎葉は持ち出す。
- （2）太陽熱消毒を行う。

（化学的防除法の注意事項）

- （1）葉裏によくかける。
- （2）散布が遅れると効果が著しく低下する。

（カ）半身萎凋病 *Verticillium dahliae*

（防除のねらい）

罹病植物に形成された微小菌核が土壌に残存し、土壌伝染する。病原菌は多犯性で、ナス科、ウリ科作物にも感染する。生育適温は22～25℃で夏季高温時には被害が減少する。

（耕種的防除法）

- （1）発病株をほ場に放置しない。
- （2）発生ほ場では連作を避ける。

（キ）果実黒斑病 *Alternaria alternata*

（防除のねらい）

春秋期の冷涼な気候で多く発生する。初期には莢の表皮組織のみが黒変するが、後には果皮内部まで黒変する。

(耕種的防除法)

- (1) 葉の枯死部分や成熟した莢では病原菌密度が上がり、伝染源となるため、管理作業に留意し、残渣は適正に処理する。
- (2) 収穫後の高温多湿条件下で多発傾向にあるので、露地では雨の日にはできるだけ収穫しないように心がける。

(ク) コナジラミ類

(防除のねらい)

施設栽培において、すす病の発生による汚れが問題となる。薬剤に対する抵抗力が強く多発すると防除が困難なので、初期防除に努めるとともに、防虫ネットの利用など総合的な防除に努める。キュウリのオンシツコナジラミの項、トマトのタバココナジラミの項参照。

(耕種的防除法)

- (1) 寒冷紗や防虫ネットを設置し侵入防止を図る。
- (2) 施設では黄色粘着資材等を利用し、成虫を誘殺する。

(ケ) アザミウマ類

(防除のねらい)

ヒラズハナアザミウマの成虫が幼果に産卵するため白ぶくれ症になる。露地栽培では飛来源が広く、被害を受けやすいので発生に注意する。

(コ) アブラムシ類

(防除のねらい)

新芽や若葉の裏に好んで寄生し、生育阻害、すす病の併発のみでなく、CMVなどのウイルス病を媒介することがある。有翅虫の飛来は露地の場合4～6月にかけて目立ってくるので、発生初期の防除を徹底する。

(サ) ネキリムシ類

(防除のねらい)

(耕種的防除法)

ハクサイの項参照

(シ) ワタノメイガ

(防除のねらい)

6～7月に葉を巻いて食害する。露地に発生が多い。葉内の幼虫をねらって防除する。

(ス) オオタバコガ

(防除のねらい)

9～10月に発生が多く見られ、夏季の高温、乾燥条件下で多発傾向にある。防除はふ化直後の幼虫を対象に行う。薬剤散布は花の中にも薬液が十分かかるようにする。

(セ) ハスモンヨトウ

(防除のねらい)

一般に9月以降発生が増加する。若齢期の防除に重点を置く。サトイモ、大豆等では比較的早くから発生を認めるので、これらの作物の発生を参考とする。

(耕種的防除法)

- (1) 老熟幼虫は捕殺する。
- (2) 施設では換気部、出入口に防虫網を設置し、成虫の侵入を防ぐ。

(ソ) フタテンミドリヒメヨコバイ

(防除のねらい)

幼虫・成虫とも新葉や茎から吸汁し、株の生長及び収量に影響を及ぼす。被害葉は黄変萎縮するので、定期的に葉裏を観察し早期発見・早期防除に努める。

(タ) ネコブセンチュウ類

(防除のねらい)] キュウリの項参照

(耕種的防除法)